

山梨県立文学館 館報

1989(平成元)年
11月 創刊

第108号



文晁の不覚	三宅 修	2
開館三十周年記念		
特設展「山と水の文学」展示資料より		3
開覧室より・寄贈資料より		4

教育普及事業より・館からのご案内		5
資料翻刻 八木義徳 結城信一宛書簡		6・7
館の誌・利用のご案内		8

開館三十周年記念 特設展

「山と水の文学」開催

令和元年7月13日(土)～8月25日(日)

山と人との関わりには、様々な姿がある。登山家を惹きつけてやまない高峰、日々の暮らしに寄り添い恵みをもたらす里山、信仰の歴史をもつ山、災害をもたらす厳しい山など、登る人にとっても、麓から眺め暮らす人にとっても、関わり方は多様である。また、山には渓谷や湖沼があり、変化に富む自然の美をもたらしている。こうした自然と向き合うことから、詩歌や小説、紀行文など、数多く

の文学作品が生み出されてきた。本展では、山と水を主題にした文学作品をとりあげ、芥川龍之介の「暑中休暇日誌」(二九〇八年)や飯田蛇笏「夏山や又大川にめぐりあふ」軸装、小島烏水の序文を付す茨木猪之吉「甲斐のやま山」画帖などの資料を展示する。

■特設展関連イベント

○特設展関連講座(年間文学講座3)

「山の描写いろいろ」※要申込・無料

7月28日(日)午後2時

講師 高室有子(当館学芸幹)

会場 研修室 定員150名

○子どもワークショップ ※要申込

「山と水からいたたく色 草木で和紙

葉書を染めよう」

やまなしの自然と水をつかって、和紙

のはがきを染めます。

7月27日(土)午後1時

講師 藤井繭子(染織家)

対象 小学生以上20名

材料費 500円

この対局に合わせ、内田修平七段(甲府市出身)と三枝昂之館長とのトーク

予告 開館三十周年記念企画展



初手を打つ本因坊文裕(井山裕太九段)(左)と河野臨九段(右)。

短歌・俳句を創作し公開合評会を行う催しが行われた。

予告 開館三十周年記念企画展

「宮沢賢治展」(仮題)

9月21日(土)～11月24日(日)開催

詩、童話に独自の世界を切り開き、現在

でも多くの愛読者を持つ宮沢賢治(一八九六

九六～一九三三)。本展では、現代に生き

続ける作品の魅力と、賢治の掲げた理想

の世界に迫る。さらに山梨出身の友人保

阪嘉内(かみない)をはじめとする賢治をとりまく

人々や、歿後の作品受容に焦点をあてて

いく。



茨木猪之吉 画帖「甲斐のやま山」
1935(昭和10)年12月末

文晁の不覚

三宅 修

「ずいぶん長かった付き合いに、ようやく一区切りつけることになった。北は北海道の樽前山から南は鹿児島島の桜島岳まで、まるでお遍路のような「同行二人」の四〇年近くの長旅だった。二〇〇年昔へのタイムスリップを楽しむ名山巡礼であった。」(『現代日本名山図会』あとがき)

「日本名山図会」とは江戸時代、文化九年(一八一二年)に出版された山の画集。江戸の医師で山好きの川村元善が収集していた谷文晁の山水画を中心に選び出した八十八座を、谷文晁が書籍の大きさに縮小模写したという。和綴本「天」「地」「人」三冊に纏められた、当時のベストセラーである。その初版本を手に入れた私は現代の写真家の眼で文晁の山を再現しようと思ひ立ち、途切れ途切れながら四〇年ほどかけて全山の追跡を終えた。二〇才台からスタートし七四歳で『現代日本名山図会』を上梓するという大仕事だった。時間がかかったのは、山の名前と地域の特定から始めなければならなかったからだ。例えば笠置山。画に書かれている所在地は播磨州。南朝ゆかり

の山なら京都府の「山城州」のはず。姫路城のある播磨州には笠置山は存在しない。似た名前の笠形山に辿り着くまでにどれほど時間がかかったことか。更にその山を文晁は何処で描いたのか。その特定だけでもどれほどの日にちがかかったことか。更に何故笠形山なのか、の理由づけが欲しい。それは向かい側の稜線上に鎮座する日光寺という寺院に参拝した折りに谷を隔てて聳えていた笠形山に心を奪われたからにちがいないと推理してみた。江戸時代の日光寺は、日光東照宮の末寺として賑わっていたという文章に出会い、なるほど徳川幕府のご威光はこんな姫路の山奥にまで及んでいたかと納得できたのである。

こんな調子で一つ一つの山に行き、文晁が絵筆をとりだした場所を特定し、好天を待って撮影していく。謎解きをするような楽しい取材だった。それだけに一冊の本になったときの嬉しさは格別だったが、完成という満足感は希薄だった。何か足りないという思いが強いのである。

何か足りない……。その一つに、山を選び方がある。歩く以外に交通手段がない江戸時代では無理もないと思うけれど、現代の山岳写真家から見ると江戸を中心に東海道、中山道、山陽道といった大街道沿いの山に集中しすぎて肝心な地方ごとの信仰の山が見落されていないか。そんな不満の上で、「何故文晁は京都や奈良への往復に甲州道中を選ばなかったのだろう。」という疑問がわいてきた。文晁は「日本名山図会」の序文に記されているように二六歳で老中松平定信のお抱え絵師になるまでの若い時代に日本国中を歩き、「行き見ざる国は数か国のみ」といわれている。その一つは蝦夷地。まだ未開の北海道へ文晁の弟谷元且が、幕府の東蝦夷巡視に同行し描いた山、五点を文晁が模写している。こんな物理的に行けないところはさておき、江戸から西へゆくときに何故甲州道中(甲州街道)は選ばれなかったのか。

甲州道中は江戸の内藤新宿から西へ、多くの山里を踏み越えて甲府盆地を経て下諏訪で中山道に合流している。南アルプスの鳳凰三山や甲斐駒ヶ岳、八ヶ岳と名山の中をゆく素晴らしい街道だ。幕末では新撰組が官軍を迎え撃とうと、小仏峠、笹子峠を越えて行った道だ。山好きと自他共に許しているはずの文晁なら一度ぐらい通っても良いのにと惜しまれる。

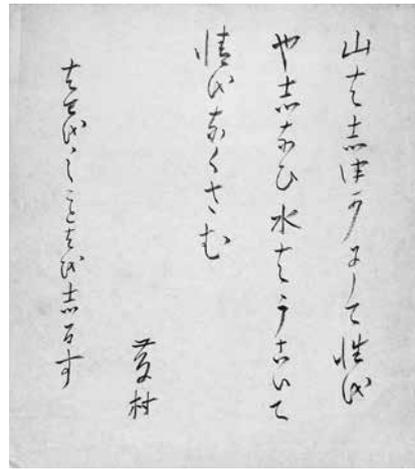
桂川(相模川)沿いの甲府盆地までの道は細かい上り下りが多いので敬遠されたのか、この街道を利用する参勤交代の大名が僅か二三に過ぎず、道幅が狭い、多数の家臣が泊まる宿場が不足など……。いずれにせよ小人数の旅なら問題なかったのと思うのだが……。

文晁の「日本名山図会」では「八岳」在甲斐州山梨郡つまり八ヶ岳のことだが、画面の左側にそれらしい山が描かれ中央の下に諏訪湖、その上に富士山がある。右に続く山は南アルプスになるだろうか。初めてこの絵を見た時はこれが八ヶ岳かと戸惑ったものだ。街道沿い、という原則で探したお陰でそれは中山道の旧塩尻峠からの展望だと判った。その時、何故葎崎や富士見あたりからの風景を描かなかったのかと思つたものだ。その時感じた不協和音のような疑問符が、塩尻峠からなら北アルプスも見えたはずと思ひ、更に北へ延びる安曇野からの北アルプスや頸城山塊が抜けているのを気づききっかけになった。文晁の山は塩尻峠を越えると木曾路に入り、木曾駒ヶ岳、木曾御嶽、恵那山と南下していく。アルプス級の高山は御嶽山、立山、白山で終わってしまうのである。やはり甲州道中を歩くべきだったよ、と私は愚痴をこぼしたくなる訳だ。

(みやげ おさむ 山岳写真家)

開館三十周年記念特設展
「山と水の文学」
資料紹介

①島崎藤村筆「洒落堂記」冒頭 色紙 館蔵



山はしづかにして性を
やしなひ水はうごいて
情をなぐさむ 藤村
はせをのこしばをしるす

松尾芭蕉の俳文「洒落堂記」の冒頭部分を、島崎藤村が墨書した色紙。「中央公論」編集長を務めた雨宮庸蔵(一九〇三〜一九九九、山梨県南巨摩郡富士川町出身)旧蔵の資料。

この色紙が入っていたと思われる「中央公論社」の封筒(角形2)の表に「編輯部御在勤中はいろいろ御世話になりました」中央公論社にて 雨宮君におくる 飯倉 島崎」と墨書されている。雨宮が「中央公論」編集長を退き出版部長になった一九三二年六月頃、東京都麻

布区飯倉片町に居住していた藤村が贈ったものと推定される。

「洒落堂記」は、近江国膳所藩の医師で芭蕉の門人、浜田珍碩(後、洒堂)の寓居「洒落堂」を、一六九〇(元禄三)年、芭蕉が訪れ、その清雅な様子を称して贈った俳文。藤村が記した冒頭の一節は「論語」の「知者ハ水を楽ミ、仁者ハ山ヲ楽ム。知者ハ動キ、仁者ハ静カナリ。知者ハ楽ミ、仁者ハ寿シ」に依拠している。

②田部重治「笛吹川の想い出」草稿

個人蔵

田部重治(一八八四〜一九七二、富山県生まれ)は、東京帝国大学英文科卒業後、東洋大学、法政大学などで英文学を講じる一方、多くの山岳紀行文を著した。木暮理太郎や画家の中村清太郎らと未知の山稜や渓谷を辿る探検的登山を試み、「奥秩父の紹介者」として知られている。この草稿は「日本風物誌」と表題をペイン書した大学ノートに記されている。「笛



吹川を溯つて見ようと真剣に考えはじめたのが大正二年五月木暮、中村の両君と金峯山から雁坂峠まで縦走した時であった。甲信の国境から眺めると、それは何ともいえない美しいなごやかな渓谷のように見えた。」と振り返っている。

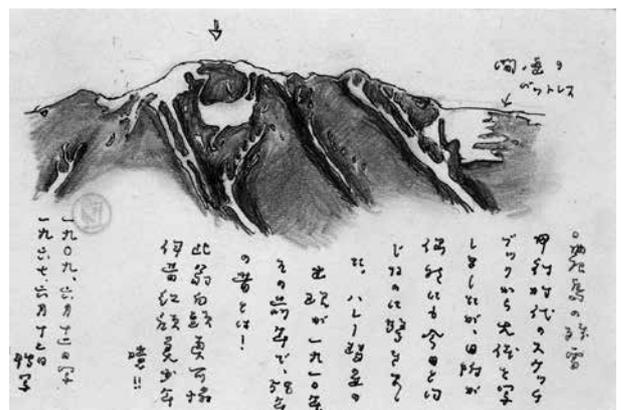
甲府盆地を北東から南西にかけて流れる笛吹川の上流の東沢は、秩父連嶺の甲武信岳に源流を発する。この東沢を田部が木暮、中村と初めて溯行したのは一九一五(大正四)年五月。その渓谷美への感動を綴った紀行文「笛吹川を溯る」は、戦後の国語教科書に採用され広く知られるところとなった。

田部は、一九一六年五月にも木暮と東沢の最奥部、釜沢をめざしたが果たせず、翌一九一七年五月、再度木暮と釜沢の溯行を試み成功した。

③野尻抱影 山寺仁太郎宛葉書

個人蔵

野尻抱影(一八八五〜一九七七)は、一九〇七(明治四十)年から五年間、県立甲府尋常中学校に英語教師として赴任していた間、山梨の山々に魅せられ、日本山岳会創設者の小島烏水に白根三山のスケッチを数々送った。烏水は「白峰山脈の記」に抱影のスケッチを紹介している。この葉書は、一九〇九(明治四十二)年六月十二日、白根三山のひとつ農鳥岳



に現れた雪形の「農鳥」のスケッチを、五十八年後の同日、改めて葉書に転写し山寺に送ったもの。葉書には「農鳥も今が見頃でせう。やがて尾が消え足も消える」とさらに鮮明になるでせう。右下にも小さい黒い鳥形が現れてゐるかと思ひます。」と書かれている。

山寺仁太郎(一九一九〜二〇一六、葦崎市生まれ)は、山梨県の山岳会「白鳳会」(一九二四年創設)会員で、一九六九年から八年間会長を務めた。山に関わる民俗学研究に取り組み、文芸同人誌「中央線」の編集発行人を長く務め、多くの文学者と交友があった。

(学芸幹 高室有子)

閲覧室より

平成から令和へ

共に歩む閲覧室

四月一日、学校や職場で新しい生活が始まるこの日は、期待や不安を抱えて過ごす一日ですが、今年はいつもととは違う高揚感があったのではないのでしょうか。私もまた、新たな時代の幕開けを告げる新元号が発表されるその瞬間を、今か今かと待っていました。

新元号「令和」は、『万葉集』の「梅花の歌三十二首」の序文「初春の令月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす」を典拠としています。「令和」は、初めて日本の古典から選ばれ、「令」という字は、元号で初めて使われる文字だそうです。新しい時代にふさわしい元号ではないでしょうか。

平成元年に開館し、平成と共に歩んできた文学館の閲覧室では、「映像になった文学作品」平成を振り返って」という展示を開催していましたが、改元の発表を受け、新元号の出典となった『万葉集』と山梨の文学者たちの関わりを紹介する「山梨の文学者と万葉集」へと展示替えをしました。

『万葉集』は、現存する最古の歌集で、

千年以上も人々に親しまれてきた古典です。成立した奈良時代から現代に至るまで、皇族から農民まで幅広い人たちが詠んだ歌が収録されています。山梨県の文学者たちもまた『万葉集』に少なからず影響を受けています。

例えば、檀一雄のエッセイ「万葉びとの声」では、『万葉集』に登場する万葉びとの歌を、身近な人の声や姿に重ね合わせていたことがうかがわれます。また、児童文学者の太田黒克彦の小説『防人の歌』は、まさに『万葉集』に収められている唐の攻撃を防ぐために九州沿岸に配備された人々が詠んだ歌を題材としています。三井甲之は、文芸雑誌「アカネ」に、「万葉の女詩人」「万葉集の寫實派歌人」「山上憶良」「大伴家持」「万葉集中の民謡」など多くの作品を発表しています。また、この他にも多くの作家たちが、和歌の鑑賞や解説など様々な視点から『万葉集』にアプローチしています。

また、雑誌「新潮」昭和十六年十二月号には、「万葉集の好きな歌」という記事があり、萩原朔太郎、壺井栄、林芙美子といった著名な文学者らが愛した歌とともに、山梨県と関わりの深い太宰治のお気に入りの歌も載っています。是非、手に取って見てもらいたい一冊です。

す。

閲覧室ではこのように、様々な角度から山梨県出身の文学者や山梨県ゆかりの文学者について、興味を持っていただけるよう紹介をしています。

今年度も、様々な展示を計画しています。文学者の誕生日にちなんだ資料紹介（九月二十四日生まれの徳永寿美子を予定）、特設展や企画展に関連した資料紹介（「太宰治を読む」他を予定）などがご覧いただけます。

普段は書庫に入っていて手に取ることのできない貴重な資料が展示されるので、閲覧室にも足を運び、静かな環境の中で、文学者との出会いを楽しみむひと時を過ごしてみませんか。

（資料情報課 外川豊子）



【寄贈資料より】（平成三十一年二月～四月）

○加藤勝氏より加藤楸郎「表裏山河」草稿など八十七点。

○石原義澄氏より石原義澄「剪定の済みし葡萄の棚ごとに樹液光りて春めぐり来ぬ」色紙。

○向山建生氏より「小林一三を知る豆ブック」三点、図書二点。

○曾根謙吾氏より深沢七郎写真など八点。

○奥野久美子氏より「芥川龍之介『山鳴』原稿・草稿からの考察」抜き刷り。

○加賀爪あみ氏より「ペンライトの光の海に飛び込んで私は波の一つのしぶき」色紙。

○萩原茂氏より「津島佑子さんを育んだ家と町の記憶」東京を歩く」抜き刷りなど二点。

○小山弘明氏より「第六十三回連翹忌」リーフレット一点、図書一点。

○鈴木俊幸氏より「山梨日日新聞」「甲陽日報」所掲書籍 安売広告をめぐって」抜き刷り。

○山本育夫氏より造本山本育夫詩集「新しい人」内容見本一点、図書五点。

次の皆様からも図書・雑誌等をご寄贈いただきました。（敬称略）

- | | |
|--------|--------|
| 相川 郁子 | 高原 玄承 |
| 浅川 玲子 | 秦 恒平 |
| 浅田 高明 | 平松 伴子 |
| 有泉 豊明 | 堀内 万寿夫 |
| 市川 孝次 | 松野 健一郎 |
| 一瀬 公弘 | 松本 徹 |
| 井上 芳寛 | 光本 恵子 |
| 宇田川 昭子 | 村松 英 |
| 鬼丸 智彦 | 矢羽 勝幸 |
| 川村 湊 | 若木 あい子 |
| 岸本 尚毅 | 和田 知子 |
| 黒沢 忍 | |

この他に団体の方々からもご寄贈いただいております。

教育普及事業より

○「俳句を始めよう 大人のための初心者俳句ワークショップ」

4月27日、俳誌「郭公」主宰の井上康明氏を講師とする初心者向け俳句教室を開催した。参加者一人ひとりの句に對する井上氏の丁寧な解説に、受講者からは、「実践的で参考になった」「瞬間に時間が過ぎた」などの声があがっていた。



○三枝浩樹初心者短歌教室

5月18日と6月1日の二日間にわたり、山梨県歌人協会会長の三枝浩樹氏を講師とする初心者向けの短歌教室を実施した。一回目は、実際に詠まれた短歌を例題にしながら、解説を行った。随時質問も受け付け、双方向で



の講義となった。二回目は、「雨」を題詠として課題が出され、講評を一人ずつ丁寧に行った。

○特設展「太宰治 生誕一一〇年―作家をめぐる物語」関連ワークショップ

5月11日、ハンドメイド作家、穂坂優氏を講師にワークショップを実施した。参加者は自由にミニチュアを組み合わせ、自分自身にとつての「富士のある風景」を作り上げた。「富嶽百景のスノードーム」という素敵な企画を楽しめた

「童心にかえり、我が子と一緒にいろいろなものをつくれた」という感想をいただいた。



館からのご案内

■教育普及事業

○開館三十周年記念

「そのことばのつづきへ」募集
開館三十周年を迎え新たに設けた当館のキャッチコピー「そのことばのつづきへ」には、ともに歩んでいく文学館でありたいという願いがこめられています。

る。これを機に、文学館からの問いの上句「あのときの出会いがあつて今がある」に続く下の句「七・七音」を募集している。応募の詳細は当館まで。

○夏のワークショップ 要申込

・「あなたの心を鏡開き 二〇一九 太神楽の世界を体験しよう」
7月30日(火) 10時20分
講師 丸一仙三・仙花
(かがみもち(夫婦太神楽))

○年間文学講座 要申込

講座1・2とも午後2時
講座1「日本文学と富士山―古典を中心に」
講師 長瀬由美(都留文科大学教授)
7月12日(金)

佐藤明浩(都留文科大学教授)
8月9日(金)・9月13日(金)

・講座2「いま『文豪』の作品を読みなおす―伝記と代表作の関係」
講師 大木志門(山梨大学大学院准教授)

6月20日(木)・7月18日(木)・8月15日(木)

※要申込の講座につきましてはお電話か当館受付でお申込ください。

○名作映画鑑賞会 申込不要

いずれも午後1時30分
・「狂った果実」6月22日(土)
・「フランダーズの犬」7月20日(土)
・「トムソーヤの冒険」8月11日(日)

○展示室

○第一～四室(展示室A) 展示替え

樋口一葉、芥川龍之介、飯田蛇笏など山梨県出身・ゆかりの作家を紹介する各コーナーの展示替えとともに、第一室で期間限定の資料展示を以下のとおり行います。

・夏の常設展 近代文学の名作3
芥川龍之介「或阿呆の一生」
6月4日(火)～8月25日(日)
・秋の常設展
近代文学の名作4
山本周五郎「青べか物語」
8月27日(火)～10月14日(月)
近代文学の名作5
山本周五郎「おごそかな湯き」
10月16日(水)～12月1日(日)

○第五室(展示室B)の展示替え

山梨出身・ゆかりの文学者百四名を二期に分けて展示しています。
・小説・評論・随筆・翻訳・ジャーナリズム・戯曲・脚本・童話・童謡
9月1日(日)
・詩・短歌・俳句・川柳・漢詩
10月5日(土)～3月8日(日)
※第五室は、9月3日(火)～10月4日(金)は休室します。

○閲覧室

○食育推進全国大inやまなし関連資料紹介

・「文学者の食卓」
6月14日(金)～7月15日(月)
○文学者の誕生日にちなんだ資料紹介
・「徳永寿美子」(9月24日生まれ)
9月13日(金)～10月3日(木)

資料翻刻

八木義徳の結城信一宛書簡(葉書)六通は、購入により当館に収蔵。

八木義徳(小説家一九一〇〜一九九九 北海道生まれ)は、早稲田大学在学中に横光利一に師事。一九四四(昭和十九)年に「劉広福」で芥川賞、一九七六年に「風祭」で読売文学賞受賞。父・田中好治は笛吹市春日居町出身で東京帝国大学医科卒業後、北海道の室蘭病院長を務め、また妻・正子は南アルプス市出身であるため、山梨とのゆかりが深い。山梨を舞台にした作品に「風祭」、「八ヶ岳」などがある。

結城信一(一九一六〜一九八四 小説家)は、「早稲田文学」を中心に短編小説を発表。一九八〇年、「空の細道」により日本文学大賞を受賞する。

八木と結城は、ともに早稲田大学出身で、八木は一九三八年に仏文科を、結城は一九三九年に英文科を卒業している。また、二人は「早稲田文学」誌上に作品を発表し、八木は第四次・第五次・第六次の「早稲田文学」の編集委員を務め、同時期に結城も作品を発表している。

掲載にあたり、ご協力いただきました八木正子氏に深謝申し上げます。

八木義徳 結城信一宛書簡(葉書)

一九五二(昭和二十六年)年三月十五日消印

冠省

「群像」四月号の御作「蛍草」をよませて頂きました。ちか頃まれにみる美しい作と感じ入りました。よんだ後で心が洗はれるやうなよい気持ちでした。

立派なお仕事をなされたあなたに敬意を表します。リ・シズムを狙はずに、リアルにかいて行つて、その結果にリ・シズムが出てくるといふことは、よほどその作品にたいする作者の思ひがこもつてゐないと出て来ないことですから、この御作、ぼくには貴重なものと思はれました。どうか、一層の御精進を期待します。草々

〈受〉東京都目黒区三谷町四五

結城信一様

〈発〉横浜市鶴見区馬場町一八六

八木義徳

〈註〉二円の官製葉書にブルーブラックインクのペン書き。消印は「新26. 3. 15後0.6」。

「群像」四月号に掲載された結城の「蛍草」を、「ちか頃まれにみる美しい作」と賞賛している。「蛍草」は、青春時代を描いた自伝的小説「蛍草」(一九五八年十二月創文社)にまとめられる連作の一編。

八木義徳 結城信一宛書簡(葉書)

一九五三(昭和二十八年)年五月(推定)日不明

拝復 お手紙拝見いたしました。先日はずいぶん勝手なことを申しました。こんどの「早稲田文学」のお作今日拝見しましたが、これは文句なく佳いお作と思ひます。

この百二十六枚の長さを、すこしも長さを感じさせず一気に読ませてくれました。これはこの作の充実した力の証拠とまづ思ひました。作中の「私」の孤独感が移つて行く背景の巧みな(実際、あなたの自然描写は柔軟で情緒が深くは好きなのですが、これはまた逆にあなたの孤独な心と眼が自然の秘密をより深くより適確につかみ出すすぐれた武器となつてゐるのでせう)季節感とともに誇張と不自然さなしに真つすぐ読者の心に入つてきます。

たゞ假キンとしてぼくの感じた欲を言はせてもらへれば、作中の「私」と教頭の前田の「非人間性」との対立がもうすこし鮮明になれば「私」の人間の孤独がもつと深まつたのではないかと思はれましたが。

それは、作者が「私」の内部にもぐりこむ時の眼と、「私」以外の人間の内部をみる時の眼とがすこし落差をもつてゐるからではないかと思ひます。

しかしこれはぼく自身もさうなのでこれはむしろ自戒の言葉なのですが、あなたが「私」や「自然」をみつめるそれと同じ眼が「他」にも拡がつて行つて下さることをぼくは期待します。こんどのお作、ぼくは実に楽しく拝見しました。お互ひにもうひとガンバリませう。

お体お大事に。

とりあえずお作の感想だけ書かせて頂きました。

〈受〉東京都目黒区三谷町四五

結城信一様

〈発〉横浜市鶴見区馬場町一八六

八木義徳

〈註〉五円の官製葉書にブルーブラックインクのペン書き、消印は不明。

「早稲田文学」一九五三年五月号に「落葉の章」が掲載されたことから、本書簡の年月を推定。「落葉の章」は、『蛍草』(一九五八年十二月 創文社)に連作の最終章として収録された。

八木義徳 結城信一宛書簡(葉書)

一九五三(昭和二十八年)年五月二十一日消印

前略

先日は遠い、しかも判りにくいところをわざわざお訪ね下さつたのに、あいにく外出してゐるとんだ失礼をいたしました。(十日会の連中と浅見さんの病

気見舞に出かけたのでした)二十日の「ワセダ文学の会」もちようど北海道からひとが訪ねてきて行くことが出来ずにしまひました。これにこりずにぜひもう一度お遊びにおいで下さるやう願ひます。その時はまた留守してるといけませんからあらかじめおハガキ頂ければ幸甚に存じます。右とりあえずおわびまで 草々

お元気をくれぐれも祈ります。

〈受〉東京都目黒区三谷町四五
結城信一様

〈発〉横浜市鶴見区馬場町一八六
八木義徳

〈註〉五円の官製葉書にブルーブラックインクのパ
ン書き。消印は「鶴見28. 5. 21後0―6」
「浅見さん」は浅見淵(かき)一八九九―一九七三
小説家・評論家)で、一九二六年に早稲田大学国文
科を卒業。一九三七年から二年間、「早稲田文学」
の編集にあたっている。

「早稲田文学の会」は、五月二十日六時から新宿
二幸裏「樽平」で行われることが、「早稲田文学」
一九五三年五月号に掲載されている。

八木義徳 結城信一宛書簡(葉書)
一九五三(昭和二十八)年十一月二十一日

拝復

ごといねいなおハガキ頂きながら、ちようど三崎の
妹のところへ出かけて行つてお返事すつかりお
そくなつてしまいました。「群像」の拙作ほめてい
ただいてうれしく思います。あなただからお世辞は
ないと思ひますので一層うれしく存じました。あり
がとう。

ところで、あなたの方「まだ調子が出ない」と言つ
ておいでですがぼくのいま痛切にほしいのもその

「調子」というやつです

もうすこし内部からコンコンわき出るものがあつて
くれたらと自分の貧困に空おそろしい気持がしてい
ます

仕事はただクルシイばかりで、すこしも気持がのり
かかつて行かないのは、ナイものをアルようにみせ
かけようとする自分のネジ曲げがそんな感情の原因
になるのでしょうか。ツライ、イヤなことです。

あなたはすこしづつ仕事を進めておられる由、一そ
れがほんとうの歩き方と思ひます。完成を期待して
います。

ぼくは今、べ切に追はれながらまだ一字も書けない
でおるところです。

〈受〉東京都目黒区三谷町四五
結城信一様

〈発〉横浜市鶴見区馬場町一八六
八木義徳

〈註〉五円の官製葉書にブルーブラックインクのパ
ン書き。消印は「鶴見28. 11. 21後6―12」
「群像」一九五三年十二月号に八木の「御柱」が
掲載された。

八木義徳 結城信一宛書簡(葉書)
一九五四(昭和二十九)年六月十一日消印

冠省

ただいま御作「ともしび」を拝見し、近頃でない感
動をうけました。立派な作品と存じます。あなたの
内部のものがいよいよ澄み深まつてきたようで、あ
なたがあなたの「孤独」をどんなに生きているかが、
私には―いまの私にはおそろしい鞭のように痛くこ
たえます。

ただいまの、いやさいきんの私は全く「雑事」その
ものの中に埋没しています。

よい作品をよませて頂いて、ありがとうございます。

〈受〉東京都目黒区三谷町四五
結城信一様

〈発〉横浜市鶴見区馬場町一八六
八木義徳

〈註〉五円の官製葉書にブルーブラックインクのパ
ン書き。「鶴見29. 6. 11後0―6」。
結城の「ともしび」は、「文學界」一九五四年七
月号に掲載。

八木義徳 結城信一宛書簡(葉書)
一九七九(昭和五十四)年八月四日消印

暑中お変わりなくおすごしのことと存じます。

この度はご新著「作家のいろいろ」ありがたく頂き
ました。私は年のせいか、このごろは手のこんだ、
そしてやたらにおしゃべり好きな小説を読むより、
こういう随想を読む方がずっと好きになりました。

お作の文章それにもあなたらしい静かな、落ちつい
た、澄んだ眼が光っていて、読み終ったあと、たい
へんさわやかないい気持になりました。

それと、たとえば荷風、犀星、岡さんなどいったん
好きになると徹底的に傾倒してゆくその入り方の篤
実な深さに敬服しました。

〈受〉目黒区三田
結城信一様

〈発〉町田市山崎団地2―2―403
八木義徳

〈註〉二十円の官製葉書にブルーブラックインクのパ
ン書き。消印は「町田79. 8. 4 12―8」
結城の『作家のいろいろ』(一九七九年七月六興
出版)には、永井荷風、室生犀星、岡鹿之助、駒井
哲郎などについての随想や、書評が収録されている。

(翻刻者 学芸課 中野和子)

館の日誌

- 3・12 (火) 春の常設展 期間限定公開 近代文学の名作1
樋口一葉「たけくらべ」(～4・21)
- 4・9 (火) 閲覧室資料紹介「山梨の文学者と万葉集」(～4・25)
- 4・19 (金) 閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介
「飯田蛇笏」(～5・9)
- 4・23 (火) 春の常設展 期間限定公開 近代文学の名作2
樋口一葉「にごりえ」(～6・2)
常設展「囲碁と文学」コーナー(～6・2)
- 4・27 (土) 特設展「太宰治 生誕110年—作家をめぐる物語」
開始(～6・23)
「俳句を始めよう 大人のための初心者俳句ワークショップ」
講師 井上康明(俳人・「郭公」主宰)
閲覧室資料紹介「太宰治を読む」(～6・23)
- 5・10 (金) 年間文学講座1
「万葉集の山部赤人の富士の山を望(み)る歌」
講師 鈴木武晴(都留文科大学教授)
- 5・11 (土) 特設展関連ワークショップ
「富嶽百景」スノードームを作ろう
講師 穂坂優(ハンドメイド作家)
- 5・15 (水) 閲覧室資料紹介「囲碁と作家」(～6・5)
- 5・18 (土) 初心者短歌教室第1回 講師 三枝浩樹(歌人)
- 5・19 (日) 第1回読書会
- 5・22 (水) 開館30周年記念 第74期 本因坊戦 第2局
プロ棋士による指導碁
短歌・俳句創作と合同合評会
- 5・23 (木) 開館30周年記念 第74期 本因坊戦 第2局
棋士と館長とのトーク・大盤解説会
- 5・26 (日) 名作映画鑑賞会 特設展関連上映「真白き富士の嶺」
- 5・30 (木) 年間文学講座2「太宰治『道化の華』—『前衛』時代の太宰」
講師 大木志門(山梨大学大学院准教授)
- 6・1 (土) 初心者短歌教室第2回 講師 三枝浩樹(歌人)
- 6・2 (日) 年間文学講座3
「太宰治—甲府での足跡をたどって」
講師 保坂雅子(当館学芸課長)
- 6・7 (金) 年間文学講座1
「万葉集の高橋虫麻呂の富士の山を詠む歌」
講師 鈴木武晴(都留文科大学教授)
- 6・8 (土) 書庫見学
- 6・9 (日) 第2回読書会

利用のご案内

■開館時間

- 展示室 9:00～17:00(入室は16:30まで)
- 閲覧室・研究室 9:00～19:00(土・日・祝日は18:00まで)
- 講堂・研修室 9:00～21:00
- 茶室 9:00～21:00(準備・片付けの時間も含まれます)
- ミュージアムショップ 9:30～16:20

■休館日(6月～9月)

- 6月3・10・17・24日
- 7月1・8・16・22・29日
- 8月5・19・26日
- 9月2・9・17・24・30日

■常設展示室観覧料

	個人	団体 (20人以上)	美術館との 共通券
一般	320円	250円	670円
大学生	210円	170円	340円

※特設展は常設展観覧料でご覧いただけます。

※65歳以上の方(企画展は県内在住者のみ)、障害者手帳をご持参の方、およびその介護をされる方、並びに高校生以下の児童・生徒の観覧料は無料です。

※企画展観覧料については、その都度定めます。

■年間フリーパスポート(定期観覧券)のご案内

文学館常設展・企画展を1年間何回でも観覧できる年間フリーパスポート(定期観覧券)を発売しています。

料金は、一般1,540円、大学生770円です。

■県内宿泊施設利用者割引のご案内

山梨県内の宿泊施設へ宿泊または宿泊予約された方で、宿泊

当日または翌日に観覧される場合、個人でも団体料金でご観覧いただけます。宿泊(予定)を証明するもの(領収書・予約クーポン券等)を窓口へ提示してください。なお20名様以上の団体は対象になりません。

■施設利用のお申し込みについて

○講堂・研修室・研究室・茶室の申込みは、使用しようとする日の6ヶ月前から原則として10日前までです。

☆いずれも休館日は受け付けません。使用上の注意は申込みの際、ご説明いたします。

■令和元年度山梨県立文学館友の会会員募集のご案内

「友の会」では、文学館を多くの皆様に利用していただくため、当館が行う文学イベント等の情報を提供しています。申し込み締め切りは特にありませんが、資格を有する期間は4月1日から、翌年3月31日までです。年会費は1,000円です。詳細は文学館内「友の会」事務局までお問い合わせください。

山梨県立文学館 館報 第108号
令和元年6月10日発行

編集兼
発行人 三枝 昂之

発行所 山梨県立文学館
〒400-0065

山梨県甲府市貢川一丁目5-35

☎055(235)8080 FAX 055(226)9032

<http://www.bungakukan.pref.yamanashi.jp/>
※紙面・記事・写真等の無断転載・転用
はお断りします。